

14:1 さて、過越の祭りとなしパンの祝いが二日後に迫っていたので、祭司長、律法学者たちは、どうしたらイエスをだまして捕らえ、殺すことができるだろうか、とけんめいであった。14:2 彼らは、「祭りの間はいけない。民衆の騒ぎが起こるといけないから」と話していた。14:3 イエスがベタニヤで、ツアラアトに冒された人シモンのお家におられたとき、食卓に着いておられると、ひとりの女が、純粋で、非常に高価なナルド油の入った石膏のつぼを持って来て、そのつぼを割り、イエスの頭に注いだ。14:4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなにむだにしたのか。14:5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そうして、その女をきびしく責めた。14:6 すると、イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれました。14:7 貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。それで、あなたがたがしたいときは、いつでも彼らに良いことをしてやれます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。14:8 この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。14:9 まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」14:10 ところで、イスカリオテ・ユダは、十二弟子のひとりであるが、イエスを売ろうとして祭司長たちのところへ出向いて行った。14:11 彼らはこれを聞いて喜んで、金をやろうと約束した。そこでユダは、どうしたら、うまいぐあいにイエスを引き渡せるかと、ねらっていた。14:12 0 となしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の小羊をほふる日に、弟子たちはイエスに言った。「過越の食事をなさるのに、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」14:13 そこで、イエスは、弟子のうちふたりを送って、こう言われた。「都に入りなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。14:14 そして、その人が入って行く家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする、わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる』と言いなさい。14:15 するとその主人が自分で、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をしなさい。」14:16 弟子たちが出かけ行って、都に入ると、まさしくイエスの言われたとおりであった。それで、彼らはそこで過越の食事をした。14:17 夕方になって、イエスは十二弟子といっしょにそこに来られた。14:18 そして、みなが席に着いて、食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります。」14:19 弟子たちは悲しくなって、「まさか私ではないでしょう」とかわるがわるイエスに言いだした。14:20 イエスは言われた。「この十二人の中のひとりで、わたしといっしょに鉢に浸している者です。14:21 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はわざわざいす。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」14:22 それから、みなが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、彼らに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしのからだです。」14:23 また、杯を取り、感謝をささげて後、彼らに与えられた。彼らはみなその杯から飲んだ。14:24 イエスは彼らに言われた。「これはわたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。14:25 まことに、あなたがたに告げます。神の国で新しく飲むその日まで、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」14:26 そして、賛美の歌を歌ってから、みなでオリーブ山へ出かけて行った。14:27 イエスは、弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしが羊飼いを打つ。すると、羊は散り散りになる』と書いてありますから。14:28 しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先に、ガリラヤへ行きます。」14:29 すると、ペテロがイエスに言った。「たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません。」14:30 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたは、きょう、今夜、鶏が二度鳴く前に、わたしを知らないとして三度言います。」14:31 ペテロは力を込めて言い張った。「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」みなもそう言った。14:32 ゲツセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。」14:33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた。14:34 そして彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」14:35 それから、イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、もしできることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈り、14:36 またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみ

こころのままを、なさってください。」 14:37 それから、イエスは戻って来て、彼らの眠っているのを見つけ、ペテロに言われた。「シモン。眠っているのか。一時間でも目をさましていることができなかつたのか。 14:38 誘惑に陥らないように、目をさまして、祈り続けなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」 14:39 イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。 14:40 そして、また戻って来て、ご覧になると、彼らは眠っていた。ひどく眠けがさしていたのである。彼らは、イエスにどう言ってよいか、わからなかつた。 14:41 イエスは三度目に来て、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。 14:42 立ちなさい。さあ、行くのです。見なさい。わたしを裏切る者が近づきました。」

はじめに

イースターシリーズ説教の第二回の今日は、イエスのからだに焦点を当てていきたいと思ひます。イエスは人の姿をした神であられましたが、私たち人間と同じように感情を持っておられました。イエスが私たちと違っていたのは、罪がないという部分です。私たちの感情や経験は、罪の性質によって汚されていいて、神に栄光をもたらすためにたびたび正されなければなりません。

ここで、弟子訓練の親役をしておられる方々と、感情のコントロールがむずかしい方に、ある本をお勧めします。Catherine Haddow 著“Emotions – Mirrors of the heart”「感情、心の鏡」（邦訳なし）です。著者は、英国の認定心理学者であり、講演会講師です。自らの専門知識と聖書を駆使して、クリスチャン信徒のカウンセリングをしています。私たちは、あらゆる感情を持ちますが、神に栄光をもたらすために感情を正す術を知りません。私の手元にこの本が 5 冊あるので、ほしい方は 500 円でお分けします。私自身が実際の価格との差額を支払っているため、ブックカートでは販売していません。

では、イエスが十字架に向かわれるまでに経験された感情のいくつかについて学んでいきましょう。今日は、イエスがそれぞれの状況にどう対処されたのか、またそれらの状況を教える機会としてどう用いられたのかがわかります。そして、それらを私たちの日常生活に役立てる方法もわかります。

1. 油注がれたイエスのからだ (1-9 節)

1-2 節で、マルコはそれがユダヤの過越しの祭の時期であることをまず読者に知らせます。イエスのからだに油が注がれたのは、おそらくマタイ（マタイ 26 : 6-13）とヨハネ（ヨハネ 12 : 2-11）が記したように、しゅろの日曜日にエルサレムへ入られる前のことだったでしょう。けれども、マルコはこれを一連の出来事として記録しています。マルコが記した 3 つの出来事はどれも、イエスのからだと弟子たちへの実践的な教えを関連付けます。この箇所から、3 つのことに注目しましょう。

a) 批判する人たち (4-5 節)

この箇所には、この女性が非常に高価な香油をイエスに浴びせたことを批判する人たちがいたと語ります。批判した人たちは、それを無駄遣いだと言いました。香油を売って、貧しい人にあげればよいのに、というわけです。批判した人たちは、その場で起こっていたことの意味を理解していなかっただけでなく、イエスの働きの尊さもわかっていませんでした。イエスは、それまでの 3 年間、家もなく、経済的支援もなく、人々からのおもてなしと施しだけを頼りに働きを続けてこられました。イエスは、数えきれない奇跡を起こし、多くの人々の人生を変えました。それなのに、身近にいた弟子であるはずの人たちが、この女性の惜しみない行いを批判したのです。

適用

日本には、大きな犠牲を払ってイエスに仕えている宣教師がたくさんいます。家族に会えないことや、自国でたくさんの経済支援を募らなければならないことなどもあります。

ですから、イエスに人生をささげて仕える人たちを批判したり、神に導かれて福音を携えていく宣教師を経済的に支援している人たちを批判したりしないようにしましょう。神に助けをいただいて、たいへんな状況でイエスに仕えている人たちに感謝と支援を実行できるようになりましょう。私たちの務めは、そのようなしもべのために祈ることです。その人たちを磨くのは、聖霊の働きにお任せしましょう。批判的な心は、私たち自身の神との関係に正しくないところがあることのあらわれです。

マタイ 7 : 1-5

7:1 さばいてはいけません。さばかれないためです。 7:2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。 7:3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。 7:4 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。 7:5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

b) イエスからの賞賛 (6-7 節)

6-7 節で、イエスはこの女性を褒め、批判した人たちを諫められました。イエスは、この女性がイエスに仕えるりっぱな行いをしたと、批判的な人たちに告げられました。貧しい人を助けるのはいつでもできるけれども、このような形でイエスのために何かをできるのはこれが最後だとおっしゃいました。イエスに褒めていただけるのは、すばらしいことです。マタイ 25 : 14-30 には、タラントのたとえ話があります。そこには、クリスチャン同士の祝福のために神が与えてくださる賜物や財源を用いることが教えられています。自分に与えられた賜物を神の栄光のために使った人たちは、イエスにほめてもらえました。一方、賜物を使わなかった人は叱られて、その賜物も取り上げられて、別の人に与えられました。

マタイ 25:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』

適用

OIC での働きも、皆さんの助けが必要です。自分の賜物が何か、使って試してみるまではわかりません。神が皆さんに与えられたもので、OIC で用いられるものは何でしょう。OIC は国際教会で、1 年しかここにいないという人もいるでしょう。それでも、その 1 年間、神はあなたの賜物と奉仕を用いることがおできになります。自分の賜物をイエスにおささげするのは、どんなときも尊いことです。なかでも、祈りは一番大切です。イエスを救い主として受け入れて愛している人で、OIC で奉仕する気持ちがあるなら、きっとあなたの賜物にぴったりの働きを見つけることができるでしょう。

油が注がれた背景 (8-9 節)

この個所で、イエスはこの行為の背景を明らかにされます。イエスは、この女性の犠牲的行為の意味は、イエスの遺体の埋葬準備として油を塗ったことだとおっしゃいました。さらに、全世界のどこでも福音が伝えられるところではこの女性を記念してこの話も語り継がれるとおっしゃいました。イエスは、この女性がイエスのためにおこなったことを、とても大切に実用的な行為とみなしてくださいました。

現代では、百貨店で高価な香水を買うことができます。

しかし、その香りは数日しか続きません。

イエスのからだに注がれた香油は、それよりもずっと香りが長続きし、数週間香りが残りました。原料はカノコソウの一種の根です。

その香りは、シソ科のハーブのひとつパチョリに似ているとも言われます。これは、大麻のような香りです。

甘くて後に残る香りです。

昔、警察官の仕事をしていたとき、大麻のにおいは非常に強いのですぐにわかりました。

イエスも死なれるまでその香油の香りが漂っていたことでしょう。

イエスが死なれるまで起こった出来事を考えれば、香油の香りは主の苦しみにかぐわしさを与える唯一のものだったでしょう。

イエスがこの上もなくつらい目に遭われたときに、その香りにどれだけ支えられたかを考えると、これはすばらしい贈り物です。

この話は、イエスのしもべたちが苦しんでいるときに、私たちも彼らを支えるようにと促してくれます。

英国で起こった最後の本物のリバイバルでは、スコットランドのスカイ島の多くの人々がイエス・キリストの香りを感じたといえます。

リバイバルでは不思議なことが起こるものです。

リバイバルは伝道とは違います。

リバイバルとは、神が大きく動いてくださり、地域全体を作り変えてくださることです。

私は以前、スコットランドのスカイ島にある小さな教会でメッセージをしたことがあります。そこは、彼らがイエス・キリストの香りを感じたという場所でした。

私はメッセージの中でその話にふれました。すると、後からある老人が私のところにやってきて言いました。

「若い先生、それは本当ですよ。イエス・キリストの香りを感じたとき、私はここにいたのです。それはすばらしい香りでした。」

私たちはリバイバルでキリストの香りを感じるような経験には恵まれないかもしれませんが。けれども、イエス・キリストを信じる信徒なら、どこに行っても主を知る知識の香りをふりまくことができる」と聖書は語ります。

コリント第二 2：14-16

2:14 しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。**2:15** 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。

2:16 ある人たちにとっては、死から出て死に至らせるかおりであり、ある人たちにとっては、いのちから出ていのちに至らせるかおりです。このような務めにふさわしい者は、いったいだれでしょう。

2. 過越しの羊であるイエスのからだ (12-26 節)

イエスは、弟子たちと「過越しの祭」の食卓を囲んでおられました。そして、ご自身のからだを血を過越しの羊にたとえられました。

キリスト教をよく知らない人のために、まずユダヤ人の過越しについて理解しておかなくてはなりません。これは、ユダヤ民族がそれまで 1,200 年以上も祝ってきた祭りでした。

神の選びの民は、エジプトで長い間奴隷となっていました。彼らはひどい扱いを受けていたので、神がモーセという人物を選び、エジプトから神の民を助け出すために遣わされました。

モーセは最初、神の民がエジプトから出て神を礼拝できるよう、自由にしてほしいとエジプトの王にお願いしました。けれども、断られました。

神は、エジプトに 9 つの災いを起こされました。それぞれの災いが起こったとき、エジプトの王には神の民を解放するチャンスがありました。しかし、彼はそうしませんでした。

そこで、神はご自身の民を解放するために、全能の力を働かせられました。

最後の災いは、出エジプト記 12：1-14 に記されています。

出エジプト記 12 : 1-14

12:1 【主】は、エジプトの国でモーセとアロンに仰せられた。12:2 「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。12:3 イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。12:4 もし家族が羊一頭の方より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。12:5 あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。12:6 あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、12:7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。12:8 その夜、その肉を食べる。すなわち、それを火に焼いて、種を入れられないパンと苦菜を添えて食べなければならない。12:9 それを、生のままで、または、水で煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。12:10 それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは、火で焼かなければならない。12:11 あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは【主】への過越のいけにえである。12:12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは【主】である。12:13 あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。12:14 この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを【主】への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。

出エジプト記 12 : 29-30

12:29 真夜中になって、【主】はエジプトの地のすべての初子を、王座に着くパロの初子から、地下牢にいる捕虜の初子に至るまで、また、すべての家畜の初子をも打たれた。12:30 それで、その夜、パロやその家臣および全エジプトが起き上がった。そして、エジプトには激しい泣き叫びが起こった。それは死人のない家がなかったからである。

この箇所から、ふたつ注目すべきことがあります。

ひとつめは、羊が傷のない雄でなければならなかったことです。

次に、羊の血が、神の裁きからユダヤの人々を守ったことです。

もし羊の血が家の門柱とかもいに塗られていなければ、その家の長男は死にます。

イエスは、ご自身がユダヤ人のための過越の羊となろうとされているとおっしゃいました。それは、ご自身の死をとおして、つまり、ご自身の血が流されることによって、人々が来たるべき神の御怒りを免れるということでした。

イエスはそれを「新しい契約」と呼ばれました。ユダヤ人だけでなく、それ以外の多くの人々のためにも、この新しい契約を結ぼうとなさっていました。

それ以外の多くの人々とは、すなわち、私であり、あなたです。

適用

ここで私たちに当てはめるべき教えは明らかです。

私たちは、イエス・キリストが旧約時代の古いいけにえの制度に取って代わられたと信じなければなりません。

旧約聖書では、羊をいけにえとして殺すことで、人の罪を覆いましたが、神はイエス・キリストをこの世に遣わされ、私たちの罪を取り去ろうとされました。

ヨハネ 1:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

イエス・キリストが私たちの罪のために死んでくださったと信じるなら、私たちは神の御怒りから救われます。

それは、ユダヤの民が大昔に救われたのと同じです。

神の御怒りは、エジプトの長子にくだされました。そして、イエスをとおして与えられる神の愛を拒絶するなら、神の御怒りは私たちにもくだされます。
選ぶのは私たち自身です。イエスを信じるという選択をまだしていない人は、今日、イエスを信じて、心に平安をいただけるようにと願います。

3. 人間の苦しみを感じられたイエスのからだ (32-42 節)

32-42 節には、人間の苦しみを感じられたイエスのからだについて記されています。
イエスは、人間としてこれ以上もないほどのつらい祈りの夜を過ごされました。イエスは神であられましたが、同時に正真正銘の人間だったのです。
この個所には、イエスがその夜 3 度にわたって祈られたとあります。
最初に、イエスはペテロとヤコブとヨハネを伴われました。
彼らは、イエスともっとも親しい弟子たちでした。
マルコ 9 章で、イエスは彼らを伴って山に登られたとあります。そこで、彼らはモーセとエリヤを見、イエスが神の御姿に変貌されるすばらしい光景を目の当たりにしました。
彼らは一般的に、イエスの側近と考えられています。
34 節で、イエスはあまりの苦しみに、支えを必要としておられました。
イエスは、ペテロ、ヤコブ、ヨハネに、イエスのそばで「目をさましていなさい」と命じられました。
これは、支えが必要だったことに加え、安全上の問題もあったのかもしれませんが。
当時、夜に屋外にいることは危険でした。エルサレムの城壁の外だったので、守ってくれるものがなかったからです。
36 節で、イエスはおっしゃいました。

「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」

イエスは、もしこれから遭う苦しみを回避する方法があるのなら、どうかそのようにしてくださいと神にお願いしておられました。
このように神に願い求められましたが、それでも、どんな結果であれ神のみこころにゆだねられました。
イエスが苦しみをだえながら一生懸命神に祈られたあと、ペテロが居眠りしているのを見つけられました。
イエスはたった 1 時間そこを離れられただけでしたが、ペテロは起きていることができませんでした。
38 節で、イエスはペテロに向かって、肉の危険性について教え、目を覚まして祈らなければならないと教えられました。
そして再びそこを離れて、同じように神に祈られました。
イエスが戻ってくると、支えであるはずの側近たちは皆眠っていました。
目を覚まして祈ってはいなかったのです。
イエスは、祈るために再び彼らのもとを離れましたが、戻られると、裏切られて罪人たちの手に渡される時が来たと言って、弟子たちを起こされました。

適用

この個所で、私たち全員が今日教えられるべきことがふたつあります。
ひとつめは、なんとしても私たちの人生における神のみこころをおこなうことです。
次に、目を覚まして祈る祈りの力で、肉に打ち勝つことです。

a) なんとしても神のみこころをおこなう。

神は、すばらしい救いを私たちに提供するために、この上もない苦しみをイエスに通らされました。神は、私たちを同じ目に遭わされることはありません。主に感謝します。
しかし、大きな犠牲を払って神のみこころにしたがひ、神の栄光のためだけに仕える道を進むようにと、神が私たちに求められるときがあります。

これは、簡単なことではありません。けれども、その働きを私たちが成し遂げるために、神が恵みと力を与え、必要を備えてくださいます。
私は今、「熟年」という本を読んでいます。
著者は、80歳を超える牧師デレック・プライム師です。
私の祈りの支援者は、70歳以上の方が多いため、この本をプレゼントしようと考えています。
この本は、65歳以上の高齢者を励ます内容です。
デリック・プライム師は若かったころ、エジンバラにあるシャーロット教会という大きな教会の牧師でした。
私は35歳のときに、この教会の礼拝に初めて参加しました。1985年のことです。
私は礼拝中、ずっと泣いていました。神が心に語り掛けてくださったからです。
それは、子どものためのお話のときにはじまりました。
当時、その教会では、子どもたちのお話で「天路歷程」の話をシリーズで語っていました。
ステージには、長い横断幕がありました。
そこには、「天の城」の絵が遠くに描かれていて、手前には、岩がごつごつした険しい道が描かれていました。
私は、心を打たれた牧師の言葉を今でも覚えています。

「巡礼者の皆さん、あなたはこの険しい道を進んでいます。」
しかし、そこには「横道の草原」があります。
牧師が語った横道は、すてきなところでした。
草が青々と茂り、花が咲き乱れています。
そんなところで過ごせたら素敵だろうなと思える場所です。
牧師は言いました。「横道の草原は魅力的ですが、皆さんは、険しい道を旅してください。それが『天の城』へ続く道だからです。」

私は35年余り、その「険しい道」を妻ウエンディとともに歩み続けてきました。
その途中には、「横道の草原」へと誘われることが何度もありましたが、神の恵みと助けによって、「険しい道」を歩み続けてこられました。
皆さんもどうか、私たちと同じく、犠牲を払ってでも険しい道を歩んでください。
天国につづく神に備えられた旅路は最善であり、道が険しくても、その旅路を進む私たちにとって神からの最高の祝福です。

b) 祈りの力によって肉に打ち勝つ。

イエスは、弟子たちにずいぶん厳しいように感じます。真夜中なので、弟子たちが眠ってもよいでしょう。
通常の場合ならそうですが、これは特別な夜でした。イエスには支えが必要でした。けれども、弟子たちはそれに応えることができなかったのです。
イエスが38節で弟子たちに指摘しようとなさったのは、肉のいのちは力強いということです。
私たちの肉のいのちは罪の性質であり、とても強力なので、神の聖霊と祈りの力によってしか打ち勝つことはできません。
この3年間で、私は定期的に祈ってくれる人々がいることの祝福に気づきました。自分で祈るのも、誰かと一緒に祈るのもよいものですが、自分のために祈ってもらうのもまたよいものです。
私たちが肉のいのちに打ち勝てるよう、祈ってもらいましょう。
何人かの友人にお願いして、定期的に祈ってもらうようにしてみてください。
肉のいのちに対する誘惑に勝てるように祈ってもらいましょう。
メンズミーティングに来られた男性は、「祈りの力」のDVDを覚えておられるでしょう。
その中では、不倫しようとした夫にとってどれほど祈りが力強いものだったかがわかると思っています。

登場人物の男性は、ある女性の部屋で高級なワインを飲もうとしていましたが、その直前にトイレで嘔吐しました。

神がその男性の妻の祈りに答えて、大きな夫婦の問題を未然に防いでくださったのです。

かくして男性は、神を信じるようになりました。

イエスは、「目をさまして祈りなさい」とおっしゃいました。

これは、私たち人間の務めです。

私たちはいつも用心深く、誘惑のもととなるような状況を見極めなければなりません。

誘惑は最初の時点で打ち負かす必要があります。

悪魔は、私たちに罪を犯させようと、じわじわと働きます。

誘惑の最初の時点で認識するのは簡単ではありません。

ひとつの例を挙げましょう。

「祈りの力」という映画では、ある女性が高級なワインと一緒に飲みましょうと男性を部屋に誘うところで、その男性が不倫の誘惑を受けます。

その男性の妻が祈っていなければ、また聖霊の力によって男性が嘔吐していなければ、彼はその女性の部屋に行き、ついには性的関係を持ってしまったでしょう。

ここが大切な部分です。

この女性と食事をしていたのが最初の誘惑ではありません。

最初の誘惑はもっと前、夫婦関係がうまくいかなかったところです。二度目の誘惑は、出張で家を離れていたときに、お勧めのレストランを尋ねようと女性に電話をしたところです。

最初の誘惑を察知できていれば、その後の誘惑は起こらなかったでしょう。

悪魔は、私たちに罪を犯させて悪魔に栄光をもたらすために、私たちを導く術を心得ています。

けれども、私たちが目を覚まして誘惑の最初の段階を見抜くことを、神はお望みです。第一段階で誘惑を拒めば、それ以降にもっと抵抗しがたい誘惑がやってくるのを防ぐことができます。

私たちが神の助けによって目を覚ましていることができますように。そして、誘惑の第一段階で気づくことができますように。

そうすれば、悪魔ではなく神に栄光をお帰しすることができるでしょう。